

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：32657

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03457

研究課題名(和文) 英語語彙指導のための先導的な教育ICTシステムの構築

研究課題名(英文) Developing an innovative ICT system for teaching English vocabulary

研究代表者

相澤 一美 (AIZAWA, Kazumi)

東京電機大学・工学部・教授

研究者番号：00222448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語学習者が楽しみながら英単語の学習を可能にする英語語彙学習システム(VOCALS)を開発して、教員や学習者に一般公開することを目的としている。本システムの特徴は、教員側が教科書コンテンツを入力すると、コンコーダンサーが起動して、使用単語がリスト化される。教師は学習させたい単語を選定し、学習者に具体的な達成目標を明示できる。学習者は、英単語をフラッシュカード機能で意味・音声・綴りを確認できる。また、出題順のランダム化や、覚えにくい単語の重点学習、単語ゲームの機能を利用できる。学生へのアンケートや教員への聞き取り調査により、3年間にわたりシステムの機能を追加し、一般公開の準備が整った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した英語語彙学習システム(VOCALS)は、日本の英語教育において決定的に不足している単語力の養成に特化し、英語の日々の授業の予習や復習に資するプログラムの開発である。このシステムでは、教員は教科書で扱った単語の中から、学習者が習得すべき語彙を明示することができる。学習者は、携帯端末を使って、隙間時間に指定された語彙を意味・発音・画像などを使って学習することができる。このシステムを普及させ、より発展させれば、英語学習者がより効率的に英単語の意図的学習が可能となる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop an English vocabulary learning system (VOCALS) and provide it with teachers and learners. The feature of this system is that when the teacher inputs textbook data, the concordancer is activated, and the words used are listed. Teachers can select the words they want learners to learn and specify the specific goals for learning. Learners can check the meaning, pronunciation, and spelling of English words using the flashcard function. They can also use the randomization of the order of questions, emphasize the learning of difficult-to-remember words, and word game functions. By giving questionnaires to students and interviewing faculty members, the system has been improved for three years and is now ready for public release.

研究分野：英語教育学

キーワード：e-ラーニング コンピュータ支援学習 語彙習得 モニタリング フィードバック ゲーミフィケーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

令和2年度以降に実施される新学習指導要領の素案では、従来の知識偏重ではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わるか」という点に重点が置かれている。また、高校では、自ら課題を発見し、解決する「アクティブ・ラーニング」の導入を検討する方向性を示された。しかしながら、外国語教育での知識の活用や問題解決を図るために、コミュニケーション能力をより強化する必然性はこれまで以上に求められるであろう。

外国語での円滑なコミュニケーションのためには、語彙力の増強が必要不可欠である。例えば、英文のテキストを読んで理解するためには、テキストで使用された語彙の98%を知っている必要があると言われてしている(Nation, 2001)。大学入試センター試験の読解問題で80%の正解を得るためにはJACET8000のうち最低5000語の語彙サイズが必要であり、TOEFLの読解問題では6,500語が必要であると報告されている。しかし、平均的な大学生の場合、4000語レベルになると半分の単語しか知らない事例が報告されている(Aizawa, 2006)。そこで、JACET 8000の4,000語レベルまでの語彙を重点学習することが提案されてきた。しかし、日本語と英語の言語構造の違いや国内のEFLの言語環境のため、語彙を効率的に学習することは困難である。さらに、ICTの導入により、「個別学習」や「協働学習」の促進が期待されているが、教育機関単位でソフト面を整備することは困難である。

本グループは、前回の基盤研究(B)の研究では、小学校、中学校、高校、大学の4つのレベルに分けて、ICTを活用した語彙学習システムの開発を行った。このシステムでは、精選された重要語をiPadによって語彙学習ができるアプリである。基本的なプラットフォームを共有し、携帯端末を最大限に活用するアプリ開発という観点では目標を達成できた。しかし、それぞれのアプリのコンテンツが独立しており、連続性がなかった。また、語彙知識の広さに焦点を当てたプログラムのため、語彙知識の深さについては、一部のアプリ以外ではタスクを盛り込むことが十分ではなかった。

日本人としての英語学習の最終的な目標にどの程度到達しているか、単語に関連する多義性やイディオム性などの知識をどの程度獲得したかを含めて、教員が学習状況をオーサリングして学習者にフィードバックできるような英語語彙学習ICTシステムの構築が期待されている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前回の科研の研究成果に基づき、学習者の語彙学習の最終目標を設定し、発達段階の授業に密着した英語語彙学習ICTシステムを構築することである。システムの開発と改善を重ねることによって、以下5点を実現する。

- (1) 教員は、教科書コンテンツに応じて目標語をカスタマイズし、タスクを設定して配信できる
- (2) 教員は、学習目標を設定し、学習者の到達度をモニタリングしてフィードバックできる
- (3) 学習者は、授業の予習や復習のためのタスクを、自宅や教室で個別学習できる
- (4) 学習者は、語彙サイズ・語彙知識の深さなどの到達目標に向けた学習進捗状況を把握できる
- (5) 学習者は、ICTを活用したgamification等のタスクで、協働学習で語彙力を強化できる

3. 研究の方法

英語語彙学習ICTシステムであるVocabulary Active Learning System(以下VOCALS)の効果の検証を行うため、複数の大学でシステムの評価を行うための検証を行った。本稿では、紙面の関係で、A大学(九州地区の国立大学)とB大学(関西地区の私立大学)で行なった実践研究を報告する。

(1) A大学での実践

(a) 参加者

2019年度前学期に「英語A-2」(必修教養英語科目)を受講したA大学工学部機械数理工学科43名であった。授業への取り組み状況から判断して、学習習慣が確立し、基礎的な英語力を備えた者の多いクラスであった。

(b) 教養英語「英語A-2」

本授業では、映画の一部を中心とする教材を使用することで、「これまでの学習の上に、応用的なリスニング力をつける」「特に、映画の場面にも、さまざまな会話の場面において、要点を聞き取り応答が出来るようになることを目指す」「扱う教材の、重要表現や語彙を習得する」の3点を目標とした。VOCALSの活用は、とりわけ3点目の題材中の語彙習得に関わる。

(c) 教材

本授業の教材は、Lander, J. S. (2014). *Hollywood English: Movie Reviews from VOA* (Tokyo: Asahi Press)であった。授業では、ユニット1から1つずつ順番に取り組み、リーディング教材で概要を把握させた後、指名しながら設問の解答を確認した。その後、音声変化の解説、のスク립トを使ってのリピーティング、オーバーラッピング、シャドウイングを行った。最後に、取り上げた回のテーマに関連して作成したハンドアウトを用いたペアワークを行わせた。VOCALSを用いた語彙指導は4回目の授業から開始した。

(d) VOCALSによる語彙指導

語彙指導の準備ができた4回目の授業で、VOCALSの使い方を説明した。説明した事項は次の通り。(i) VOCALSへの登録(学生登録:メールアドレス、パスワード、姓、名、学籍番号、学校名など、クラス登録:クラスコードの入力など)(ii) VOCALSでの学習ログインの後、メ

ニューから学習するリストを選択し、リスト一覧(ユニット1~ユニット10。それぞれに30語前後の「単語テスト」に向けて学習する重要語句あり)で表示された単語を見て、音声聞いて、あるいは「フラッシュカード」を活用して学習するやり方を説明した。なお、単語と意味をマッチングさせる GAME への取り組みはオプションとした。)

(e) 単語テストの実施

5回目の授業から既修のユニットの重要語句(初回はユニット1から出題)から5問から成る単語テストを順番に10週にわたり実施することとした。単語テストは授業の冒頭に実施し、授業者(筆者)が5つの単語を2回読み上げ、その綴りと意味(日本語)を書くこと(各1点、合計10点)とし、その場で自己採点させた(約10分)。単語テストのための用紙は、解答・自己採点の後、得点と学習時間(PC、スマホ、および合計)を分で記載させた。用紙は回収し、1人ずつ確認しながら得点と学習時間を表計算ソフトに入力した。自己採点の間違ひは修正し、用紙は次の時間に返却した。

(f) データ収集と分析

単語テストについては、綴り・意味・合計について学習者ごとに10回分を合計した(総計100点)。集計したデータについて、綴り・意味・合計の分布に特徴的な傾向があるか、また、綴りと意味のどちらの正答率が高いのか分析することとした。併せて、VOCALSでの単語学習について、スマホおよびPCの取り組み時間、また総学習時間を集計し分析することとした。

単語テストが終了した後に、VOCALSについてのアンケート(語彙学習についてのアンケート)をウェブ上で実施した。アンケートでは、VOCALSの使いやすさなどについて択一式で回答してもらい、VOCALSの良かった点・改善を望む点を自由記述で書いてもらった。収集・集計したデータのうち、「使いやすさ」について考察することにした。

(g) 結果と考察

表1に、単語テストの結果をまとめた。総計(100点満点)について、平均64.1点($SD = 16.4$)、最小値18点、最大値90点で、多くの学生が6割強の得点である一方、取り組みの芳しくない下位の者も存在した(中央値65点、最頻値79点、歪度 $= -0.8$)。出題した単語がどの回の5語も全く初見のものが多かったため、特に下位の学生には簡単には覚えられなかったためと考えられる。つまり、クラス全体としては学習習慣の確立した学生が多くても、下位の学生はVOCALSへの取り組み、そして単語テストへの準備が不十分なまま推移したと推定される。今後は、個に応じて学び方を助言する、返却時のコメントを工夫する、など取り組みの芳しくない者へのきめ細やかな指導が必要である。

綴りの得点(平均33.3点、 $SD = 7.4$)と意味の得点(平均30.5点、 $SD = 8.9$)について、若干(2.8点)意味の得点が低く、この差は統計的に有意であった($t(42) = 5.621, p < .01$)。この結果は、ほとんどが初めて見る単語の学習においては綴りを覚えることに集中しがちで、意味を覚えることが二次的になった学生が多かったからと思われる。多量の既習のテキストの中から「単語テスト」に向けて覚えるべき単語を焦点化できるVOCALSのよさが、綴りのみならず意味の定着にもつながる指導の工夫が必要である。そこでは、綴りと意味をマッチングさせる、単語の音声から意味を思い浮かべるなど、語彙学習方略を含めた多面的な指導を検討したい。

表2に、VOCALSでの学習時間(スマホ、PC、総計)の結果をまとめた。総学習時間について、平均171.3分($SD = 124.8$)、最小値6.0分、最大値510分で、各回の平均では約17分学習していることがわかった。中央値145.0分、最頻値110.0分、歪度1.4で、学習時間の分布について平均値から左側に山があり、平均より少ない学習時間の者が多いと言える。

表1. 単語テスト(点)(綴り50点満点、意味50点満点、総計100点)

	綴り	意味	総計
平均	33.3	30.5	64.1
SD	7.4	8.9	16.4
最小	11.0	7.0	18.0
最大	43.0	44.0	90.0
中央値	33.0	32.0	65.0
人数	43	43	43

表2. 学習時間(分)(スマホ、PC、総計)

	スマホ	PC	総学習時間
平均	86.8	84.5	171.3
SD	91.2	78.8	124.8
最小	0.0	0.0	6.0
最大	450.0	390.0	510.0
中央値	63.0	80.0	145.0
人数	43	43	43

スマホでの学習時間は平均86.8分、 $SD = 91.2$ 、一方、PCでの学習時間は平均84.5、 $SD = 78.8$ で、若干(2.3分)スマホでの学習時間が多かったが、この差は統計的に有意ではなかった($t(42)$)

= 0.127, n.s.). 特徴的なことは、スマホ、PC のいずれについても *SD* が極めて大きく、学習者間で学習時間の差が極めて大きいと言える。

(h) 語彙学習のアンケート

実施したアンケートについて、VOCALS の 単語リストの閲覧と フラッシュカードの使いやすさに関する項目（5 者択一：非常に良い、良い、どちらとも言えない、悪い、非常に悪い）の集計結果と自由記述（感想）を報告する。なお、VOCALS に取り組んだ 43 名のうち 40 名がアンケートに回答した。

「非常に良い」(20.0%)、「良い」(25.0%) と、半数弱の学生が VOCALS を肯定的に評価している。一方、「悪い」(20.0%)、「非常に悪い」(15.5%)が合計 35.5%であった。

「非常に良い」(20.0%)、「良い」(32.5%) と、半数以上の学生が VOCALS を肯定的に評価している。一方、「悪い」(20.0%)、「非常に悪い」(12.5%)が合計 32.5%であった。このように、単語リストの閲覧よりもフラッシュカードの方がやや使いやすいという結果となった。この結果を踏まえて、自由記述を見てみる。

VOCALS の使いやすい理由として、まず「単語帳として一番使いやすかった」とあった。ほとんどの学生が高校時代に市販の単語帳や自作の単語帳を使って単語を覚えていたと思われる。単語テストも毎回の授業であった学生は多かったと考える。それと比較して、スマホや PC に日常的に親しんでいる学生は、VOCALS は「アクセスしやすい」「使いやすい」「利用しやすい」「便利」「音声付きで覚えやすい」といった肯定的な感想を持ったと考えられる（他の学生の感想）。

一方、VOCALS は使いにくいという理由に「(紙の)単語帳の方が使いやすい」とあった。ひとつには、前述のスマホや PC での学習に慣れている学生と異なり、そうでない学生が大学 1 年生の前期の段階では少なからず存在したことがある。こういった学生は、大学での学習を通じて、広くデジタル媒体での学習に慣れてくると「使いやすい」という実感を抱くようになるのではないかと。また、「スマホでは見づらい」といった記載が 5 件あった。「単語リストの閲覧」や「フラッシュカード」などの仕様について、工夫を検討する点かと思われる。

(2) B 大学での実践

(a) 参加者

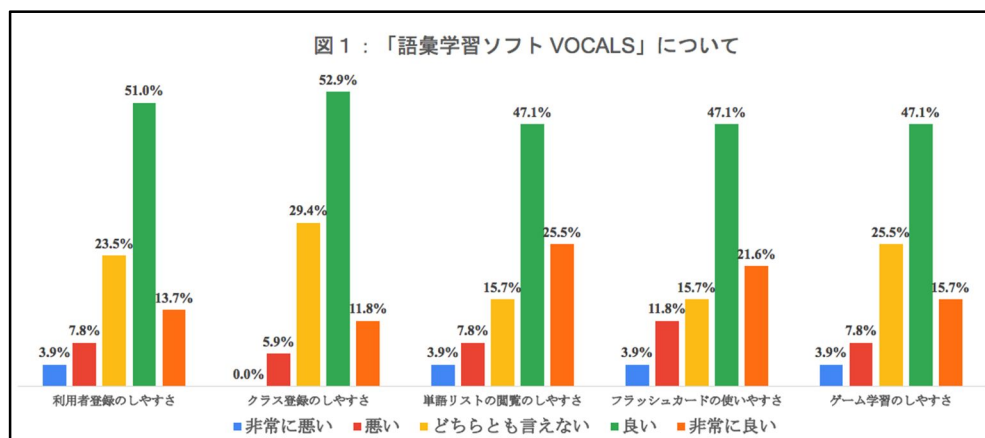
調査対象者は関西の私立大学文学部英文学科に属する英語教員志望大学生で、51 名（女性：33 名、男性：18 名）が研究に参加した。

(b) 調査の方法

調査は Google フォームを用い、インターネット上で回答できる方式を採用した。調査期間は 2019 年 11 月 7 日から 12 月 20 日であった。調査期間中、調査対象者は各自の学習ペースに合わせて、自由に「語彙学習ソフト VOCALS」を活用した。そして、学習期間終了後、アンケート質問項目に回答した。

(c) 調査結果

研究参加者は「VOCALS」の利便性について、「利用者登録」、「クラス登録」、「単語リストの閲覧」、「フラッシュカード」、「ゲームによる学習」の 5 項目について 5 段階で評価した。その結果、すべての項目で評価結果に有意な差が見られた。「VOCALS」を使用した学習者の約半数は、総体的に「良い」という好評価をもった。しかし、「利用者登録のしやすさ」、「クラス登録のしやすさ」、「ゲームによる学習のしやすさ」に関しては、「どちらとも言えない」という評価が 25%前後あり、「単語リストの閲覧のしやすさ」や「フラッシュカードの使いやすさ」における「良い」や「非常に良い」という評価と比較した場合、これらの 3 項目については改善の余地を示唆しているのかもしれない（図 1 参照）。



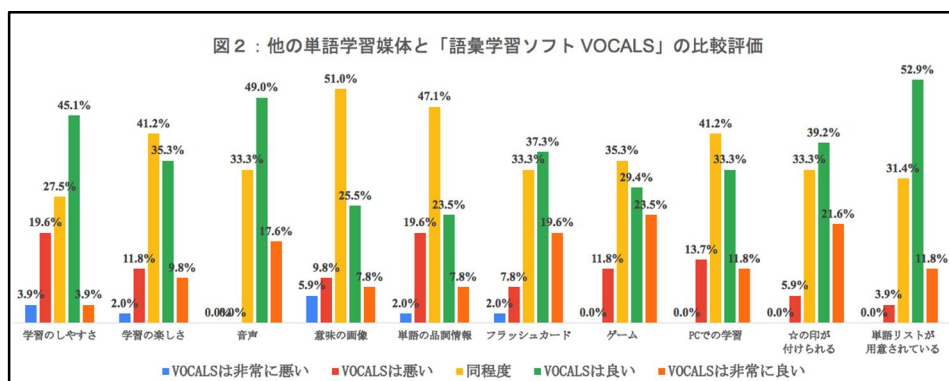
「良い」という好評価をもった。しかし、「利用者登録のしやすさ」、「クラス登録のしやすさ」、「ゲームによる学習のしやすさ」

に関しては、「どちらとも言えない」という評価が 25%前後あり、「単語リストの閲覧のしやすさ」や「フラッシュカードの使いやすさ」における「良い」や「非常に良い」という評価と比較した場合、これらの 3 項目については改善の余地を示唆しているのかもしれない（図 1 参照）。

研究参加者はさらに、他の英単語学習媒体との比較に基づき「VOCALS」の評価を行った。比較評価の項目は以下の 10 項目であった：「学習のしやすさ」、「学習の楽しさ」、「音声」、「意味の画像」、「単語の品詞情報」、「フラッシュカード」、「ゲーム」、「PC による学習」、「」で印をつけられる」、「単語リストが用意されている」。その結果、「ゲーム」の項目を除く 9 項目において評価結果に有意な差が見られた。「VOCALS」に対する評価が高かった項目は「音声」($M=3.84, SD=0.70$)、

「 で印をつけられる」(M=3.76, SD=0.86)「単語リストが用意されている」(M=3.73, SD=0.72)「フラッシュカード」(M=3.65, SD=0.88)「ゲーム」(M=3.65, SD=0.86)であった(図2参照)。これらの項目は「VOCALS」の長所としても高い評価を得た。

「VOCALS」の良かった点を複数回答可で調査した結果、「音声」(51.0%)「学習のしやすさ」(49.0%)「 で印をつけられる」(49.0%)「フラッシュカード」(43.1%)などが示された。また、「VOCALS を使ってみて、どの語彙知識が強化されると思ったか」という質問に対しては、「語彙量」(70.6%)が最も多く、「単語の発音」(37.7%)「単語の聴き取り」(25.5%)「単語の使い方」(21.6%)がそれに続いていた。一方、「VOCALS」の短所として指摘された主な項目は、「自分で単語リストを作成できない」(37.3%)「学習のしやすさ」(25.5%)「意味の画像」(21.6%)「PCでの学習」(21.6%)であった。「あなたは VOCALS を使い続けたいと思いますか」という質問に対しては、「どちらともいえない」(51.0%)が最も多く、「はい」(27.5%)と「いいえ」(21.6%)は拮抗していた。「VOCALS を使い続けたい」理由としては、「いつでも利用ができて、情報が豊富」「ゲーム形式で単語が覚えられ、楽しく学習ができたから」「ゲームが非常に面白く、また、ランキングなども出るのもモチベーションになると感じた」「効率よく学習することができるから」など、「VOCALS」の機能に関するものが多かった。一方、「VOCALS を積極的に使い続けたいとは思わない」理由としては、「スマホから使いづらいため」や「使い慣れた単語帳があり、それを使った方が効果的に感じるから」など、学習媒体に関する言及が多かった。さらに、「単語



学習を始めるまでに様々な手順を踏まなければならない、面倒に感じたから」や「VOCALS 以外にも似たような単語学習アプリがあるため」など、「VOCALS」の機能上の問題や

新規性の欠如に関する理由もあった。

4. 研究成果

(1) A大学の実践では、VOCALS の持つ、日頃の授業で取り上げる英文テキストから、容易に「学ばせたい、覚えてもらいたい」単語を抽出できる価値は大きいと感じた。一方、VOCALS を使って、10週にわたって既習の単語を覚えさせ、単語テストを実施したが、このアプリのよさを周知し、「取り組みの芳しくない学生」が意欲的に取り組むためには、いっそうの創意工夫が必要であったとも感じた。本実践で得ることができた発見と知見を、今後の語彙指導に活かしていきたいと思う。

(2) B大学での実践では、日本の英語教育や英語学習について知見のある英語教員志望大学生を対象に行った調査から、本研究プロジェクトで開発した「語彙学習ソフト VOCALS」の利便性に対して、概ね高い評価を得たことが明らかになった。特に、単語学習時に音声情報が得られる点や記憶すべき単語に印を付けることができる点など、学習のしやすさに対して評価が高かった。また、ゲーム形式を取り入れた学習など、学習動機を向上させる機能についても好感が得られた。一方、「今後も VOCALS を使い続けたいか」という質問に対しては、「どちらともいえない」や「いいえ」という回答が約7割を占めた。このような「VOCALS を積極的に使い続けたいとは思わない」という回答の背景には学習媒体の影響があった。具体的には、多くの学生が単語帳や単語カードなどの紙媒体を介した語彙学習に慣れている点やスマートフォンでは使いづらいという点が示された。また、利用者登録やクラス登録のしやすさという点に関しても改善の余地を示唆する結果が示された。

(3) 現在、世界的に MALL (Mobile Assisted Language Learning) の研究が一段と盛んになってきている。その点で、本研究は本グループが理想に近いと考える語彙学習システムを開発することができた。さらに、本システムが、国内外で大きなインパクトとなるためには、教室における厳密に統制された研究を行い、語彙学習システムの効果に関するエヴィデンスを積み重ねていかなければならない。本システムを一般公開し、賛同者を得て、システムの改善を図ることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Nadasdy, P., Aizawa, K., & Iso, T.	4. 巻 1
2. 論文標題 Testing the reliability of the New General Service List Test (NGSLT) in order to better evaluate Japanese university students' written receptive vocabulary levels	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Future-proof CALL: language learning as exploration and encounters	6. 最初と最後の頁 220-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14705/rpnet.2018.26.840	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 折田充・村里泰昭・小林景・Richard Lavin・吉井誠・神本忠光・相澤一美	4. 巻 47
2. 論文標題 英語心内辞書の構造化における意味と形態の関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 赤松信彦	4. 巻 100
2. 論文標題 多義語学習におけるインプットの重要性について - 英語教科書コーパスに基づく前置詞ATの分析 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社大学英語英文学研究	6. 最初と最後の頁 223-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 相澤一美	4. 巻 67(11)
2. 論文標題 受容語彙はどのように獲得されるか: 『見たことがある』から『理解できる』への転換	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazumi Aizawa, Tatsuo Iso, and Paul Nadasdy	4. 巻 1
2. 論文標題 Developing a vocabulary size test measuring two aspects of receptive vocabulary knowledge: Visual versus aural	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 CALL in a climate of change: Adapting to turbulent global conditions	6. 最初と最後の頁 1~6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14705/rpnet.2017.eurocall2017.679	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 折田充・村里泰昭・小林景・神本忠光・吉井誠・Richard S. Lavin・相澤一美	4. 巻 45
2. 論文標題 習得した語彙知識のクラスター構造は保持されるか 英語心内辞書の変容促進のための自学学習の効果検証	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 KASELE BULLETIN	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nobuhiko Akamatsu	4. 巻 41
2. 論文標題 Do cognitive linguistic insights help Japanese learners improve their use of English articles?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育研究(関西英語教育学会)	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合田美子	4. 巻 59
2. 論文標題 インストラクショナルデザインを概観する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護教育	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 David Coulson	4. 巻 18
2. 論文標題 Task-Based Language Learning in a Real-World Digital Environment: The European Digital Kitchen (Book Review)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 CALL-EJ	6. 最初と最後の頁 64-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.13140/RG.2.2.21564.74881	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相澤一美	4. 巻 65
2. 論文標題 語彙習得を理解するための基本	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田充・小林景・神本忠光・菅岡強司	4. 巻 19
2. 論文標題 発話思考データ分析から見る L2 心内辞書構造 クラスター数・アクセス順序と語彙サイズの関連度	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 大学教育年報	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田充・村里泰昭・小林景・相澤一美・神本忠光・吉井誠・Richard Lavin	4. 巻 44
2. 論文標題 英語心内辞書の変容を目指した単語学習プログラムの効果	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KOSAKA Atsuko and NAGASAKI Masahiro	4. 巻 34
2. 論文標題 Literacy Talk among Readers in EFL Classroom: Book Discussions and Book Introductions	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 文明21	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamada, M., Goda, Y., Matsukawa, H., Hata, K. and Yasunami, S.	4. 巻 23
2. 論文標題 A Computer-Supported Collaborative Learning Design for Quality Interaction	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 IEEE Multimedia	6. 最初と最後の頁 48-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1109/MMUL.2015.95	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamada, M., Goda, Y., Matsuda, T., Saito, Y., Kato, H. and Miyagawa, H.	4. 巻 28
2. 論文標題 How does self-regulated learning relate to active procrastination and other learning behaviors?	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Computing in Higher Education	6. 最初と最後の頁 326-343
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Nadasdy, P., Aizawa, K., & Iso, T.
2. 発表標題 Testing the reliability of the New General Service List Test (NGSLT) in order to better evaluate Japanese university students' written receptive vocabulary levels
3. 学会等名 EuroCall 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshiko Goda
2. 発表標題 Beyond Self-Regulated Learning: New Directions and Challenges in Learning
3. 学会等名 Artificial Intelligence Forum IV
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 折田充・相澤一美・村里泰昭・小林景・Richard S. Lavin・吉井誠・神本忠光
2. 発表標題 学習方法の違いで英語心内辞書の構造に差が生まれるか
3. 学会等名 第44回全国英語教育学会京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Humphries, S., & Akamatsu, N.
2. 発表標題 English majors and non-majors' speaking attitudes
3. 学会等名 JALT 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中貴子・赤松信彦
2. 発表標題 日本人大学生の英語力とモチベーション - 習熟度による比較 -
3. 学会等名 第44回全国英語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 折田充・村里泰昭・小林景・Richard Lavin・吉井誠・神本忠光・相澤一美
2. 発表標題 英語心内辞書の構造化における意味と形態の関係
3. 学会等名 第47回九州英語教育学会鹿児島研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相澤一美
2. 発表標題 外国語学習における語彙習得のメカニズムと到達度目標
3. 学会等名 神戸学院大学共通教育センターFD研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相澤一美
2. 発表標題 外国語における語彙習得のプロセスと指導法
3. 学会等名 日本独文学会ドイツ語教員養成・研修講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相澤一美
2. 発表標題 小中高大の連携と語彙指導の実践
3. 学会等名 宮城教育大学教員キャリア研究機構講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumi Aizawa, Tatsuo Iso, and Paul Nadasdy
2. 発表標題 Developing a vocabulary size test measuring two aspects of receptive vocabulary knowledge: Visual vs. aural
3. 学会等名 EuroCall 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田依子・相澤一美・高橋千佳子・市毛洋子・高橋留美
2. 発表標題 語彙と文法のインターフェイス：名詞の理解が文解釈に与える影響について
3. 学会等名 第55回JACET 国際大会 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 磯達夫・相澤一美
2. 発表標題 接辞の習得順位に関する再検証
3. 学会等名 全国英語教育学会第43回島根研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 折田充・村里泰昭・小林景・Lavin, R.・吉井誠・相澤一美・神本忠光
2. 発表標題 英語心内辞書の再構築・変容 「動詞クラスター」学習プログラムの効果
3. 学会等名 全国英語教育学会第43回島根研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 相澤一美
2. 発表標題 小学校英語単語の選定と学習アプリの試作
3. 学会等名 小学校英語教育のための「語彙と文字指導についてのセミナー」JACET教育問題研究会・LET関東支部
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 折田充・村里 泰昭・小林 景・相澤 一美・神本 忠光・吉井 誠・Lavin, R.
2. 発表標題 英語心内辞書における名詞クラスターの構造化
3. 学会等名 第46回九州英語教育学会沖縄研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshiko Goda
2. 発表標題 Effective TELL for Self-Regulated Learning and Collaborative Learning
3. 学会等名 International Conference on Computers in Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長崎政浩・吉沢郁生・小坂敦子
2. 発表標題 英語教室をワークショップにー自立した英語学習者の育成を目指して
3. 学会等名 全国英語教育学会第43回島根研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 David Coulson and Li Bing
2. 発表標題 Corpus study of the lexical characteristics of Extensive Reading Central
3. 学会等名 Extensive Reading World Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Aizawa, K., & Iso, T.
2. 発表標題 Developing a vocabulary learning system on iPad for young learners
3. 学会等名 EuroCall 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 相澤一美
2. 発表標題 工学系クラスでの英語の語彙指導の実践
3. 学会等名 石川有香科研第1回公開研究会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 磯 達夫
2. 発表標題 日本の英語教育における言語習得の可能性 言語学と言語教育に必要な実践的理論の提唱 : 語彙編
3. 学会等名 日本英文学会関東支部第12回(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 磯 達夫・相澤 一美
2. 発表標題 産出的接辞知識と語彙サイズの関係
3. 学会等名 全国英語教育学会 第42回埼玉大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 磯 達夫
2. 発表標題 工学系の学生が楽しんで受ける語彙テストを目指して
3. 学会等名 石川有香科研第1回公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Akamatsu, N., & Tsuzuku, A.
2. 発表標題 The benefit of a cognitive linguistic approach to learning noun countability
3. 学会等名 The 6th UK Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 赤松信彦
2. 発表標題 学習環境と母語が第二言語心的辞書に与える影響について
3. 学会等名 第42回全国英語教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Goda, Y., Yamada, M., Hata, K., Matsukawa, H., & Yasunami, S.
2. 発表標題 Effects of Flipped Jigsaw Collaborative Learning on English as a Foreign Language Learning Anxiety. Emerging Technologies for Education: First International Symposium
3. 学会等名 SETE 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 西原哲雄・相澤一美・他5名	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉出版	5. 総ページ数 170
3. 書名 英語教育と言語研究	

1. 著者名 折田充・村里泰昭・小林景・神本忠光・吉井誠・Richard Lavin・相澤一美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 429 (307-316)
3. 書名 ことばを編む	

1. 著者名 赤松信彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 246 (3-40, 58-119, 153-168)
3. 書名 英語指導法 理論と実践 - 21世紀型英語教育の探究 -	

1. 著者名 相澤一美・磯達夫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 118(32-43)
3. 書名 ESP語彙研究の地平	

1. 著者名 望月正道・相澤一美・笠原究・林幸伸	4. 発行年 2016年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 196
3. 書名 英語で教える英語の授業 その進め方・考え方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>英語語彙学習システム(Vocabulary Active Learning System) https://vocals.jp 2017年作成, 2018年, 2019年改訂 相澤一美・磯達夫 (2019年) 「VOCALS 教員用マニュアル」東京電機大学 相澤一美・磯達夫 (2019年) 「VOCALS 学習者用マニュアル」東京電機大学</p>

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	合田 美子 (Goda Yoshiko) (00433706)	熊本大学・教授システム学研究センター・准教授 (17401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	赤松 信彦 (Akamatsu Nobuhiko) (30281736)	同志社大学・文学部・教授 (34310)	
研究分担者	磯 達夫 (Iso Tatsuo) (40438916)	東京電機大学・工学部・准教授 (32657)	
研究分担者	折田 充 (Orita Mitsuru) (60270386)	熊本大学・大学院人文社会科学部(文)・教授 (17401)	
研究分担者	長崎 政浩 (Nagasaki Masahiro) (70512052)	高知工科大学・共通教育教室・教授 (26402)	
研究分担者	D・G Coulson (David Coulson) (50341988)	立命館大学・言語教育情報研究科・教授 (34315)	